
そして世界が終わったところに

AK S74U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして世界が終わったところに

【Nコード】

N0332X

【作者名】

AKS74U

【あらすじ】

世界同時にゾンビが大量発生、その前から彼は襲われると知っていた。

彼は3年前の事件時の唯一の生き残りなのだから。

彼は復讐する、あの忌々しい事件を終わらせるために。

第1話 2度目の世界の終わり（前書き）

初めて書いたものです。中学生なので不定期更新ですがそれでも見てくれたらうれしいです。

第1話 2度目の世界の終わり

俺はあの時最悪の化物達が襲ってくるという事を知ったそして武器を手にした、ナイフ

ハンドガンのUSP ショットガンのM4super90 スナイパーライフルのPSG1を取り出した。

M4super90 PSG1をかばんに、USPをベルトにさしマガジンを取り出す、各20個持ち

スラッグ弾を約200発持つそしてかなり大きめのかばんに入れるその後出発した。

俺は工藤刹那中学二年生だ。

ただみんなと違うところがあるとすれば、一人でアメリカ軍の一個中隊を皆殺しにできるぐらいに強いし

(何でわかるのかって？実際にやった事があるからだよ)、ある軍隊に所属している事だな。

明日から夏休みだと浮かれている馬鹿が居る朝、集会の前にゾンビが大量に発生したためみんなパニックになり犠牲者が増えた、今学校の体育館に立て籠っている、ゾンビは外から入ってきたため体育館が安全だったからだ、それでも何匹かは入ってきてゾンビが増えた、俺だけなら何とかなるが今約120人と一緒にいるのだ、だから銃は使えない。しょうがなくナイフで戦っているのだが、戦えるのが俺と同じ軍に居る4人しかない。皆銃は持っているが俺と同じ理由で使えない、もしかしたら犯人だとか言われるかもしれないしね。

もともと中学生が軍に入れるのはおかしいのだ、だが皆には理由がある、

孝は9歳の時に姉を目の前で殺され姉を殺した奴と戦った、体格からして負けるはずの孝は勝ったのだ、それを見ていた軍人がスカウトしたらしい。

舞は11歳の時外国でテロにあったが銃を奪い撃退助けに来た軍人が皆の証言を聞いたときすごく驚いたらしい。

レイカと奏は9歳の時親族全員殺された、双子の彼女たちは保護された時には血の海の中で手を握り合っていたのだという。犯人はその中に倒れていたらしい。金持ちだから金目当ての強盗だったそう
だ。

俺の事はまた今度話そう。

皆それぞれいろんな物で戦っている、孝はブッシュナイフ 舞は小型の刀 レイカはナタ

奏は長いナイフを使っている。皆必死になって戦っているのだが、それでも犠牲者が増えていく、皆はちゃんと倒していないからだ。俺は「頭を狙え」と叫んだ、皆こちらを見て頷いた。こっちのゾンビが動かないのを見たからだろう。

こうして地獄が始まった。

第1話 2度目の世界の終わり（後書き）

変な始まり方ですいません。

御感想お待ちしております。

どんな武器が出て欲しいとかもあればよろしくです。

第2話 悪夢のハジマリ(前書き)

工藤刹那

頭脳 ★★★★★☆

戦闘力 ★★★★★★

統率力 ★★★★★★

速さ ★★★★★☆

第2話 悪夢のハジマリ

ゾンビが減ってきたころ「きゃあああああ」という悲鳴が聞こえた。

俺は「助けてくる」と言い走った。途中ゾンビが大量にいたので広く迂回して4分ぐらい走ったいた（かなり速いので2kmぐらい）。少女がこっちに向かって走ってきた、制服のリボンからして二年生のようにだ。少女を抱きとめて「耳をふさいでな」とUSPを取り出しながらいった、少女は「そんなおもちゃで勝てるわけ無いでしょ」といった「いいから耳ふさげ」といって近くの奴を狙った敵は13、マガジンの弾数も13ちょうど、はずさなければすぐにけりが付く、ゾンビがいつせいに襲い掛かってくる、俺は1体ずつ確実にしとめていく結果20秒でけりが付いた。少女はぼーっとしている。

少女を抱いて（お姫様抱っこ）走った、少女は「え、ちょっと」と暴れていた。戻ると舞 レイカ 奏にぼこぼこにされた。なぜだ？心配してくれていたのだろうか。

その後、5人＋1人で会議をした1人は少女——名前は栞だ。俺の腕から離れない。3人の視線が痛い。

俺は「まず武器を確認しよう」と提案した、その後話あった結果武器はこんな感じだった

刹那

ナイフ

USP 13発マガジン19個

M4super90 スラッグ弾約200発

PSG1 20発マガジン20個

孝

ブッシュナイフ

ハンドガンのデザートイーグル 7発マガジン10個

スナイパーライフルのL96 Arctic Warfare M

a g n u m 10発マガジン15個
サブマシンガンのM P 7 40発マガジン20個
舞
小刀
サブマシンガンのF N P 9 0 50発マガジン50個
ハンドガンのG L O C K 1 8 33発マガジン20個
奏
長いナイフ
ハンドガンのF N F i v e — s e v e n 20発マガジン20個
アサルトライフルのA N 9 4 30発マガジン20こ
レイカ
ナタ M 7 9 グレネードランチャー 50発
アサルトライフルのT a v o r T A R — 2 1 30発マガジン
20個
になった。
葉はついていけなくなっ**て**ぼーっとしていた。

番外編 登場人物紹介（前書き）

生い立ち 主に使用する武器の種類です
やっとなメインがそろった、考えるのって大変だ
随時更新

番外編 登場人物紹介

くどうせつな
工藤刹那

3年前の悲劇の中でただ一人生き残った少年。親がいないことで学校で馬鹿にされている。

学校では運動オンチとして知られているが、本当は運動神経抜群。イケメン。

軍の中で死神と呼ばれている。かなり鈍感なハーレム野郎。4人を兄弟のように思っている

ふじみまい
藤美舞
ハンドガン スナイパーライフル 近接の三つを得意とする

テロに遭うが銃の使い方をしていたため（なぜ？）SPの人がもっていたハンドガンを使い一人を殺しAKを奪い殲滅するなど戦闘能力が高い。

刹那のことが気になっているが1歳年上だからか姉のように慕われている、ようは片思い。

さいとうたかし
サブマシンガン ハンドガンの二つを得意とする
西藤孝

4歳のころから色々な格闘技をしていたため近接戦闘はかなり強い。姉を目の前で殺されてから軍に入る。近接 ハンドガンが得意。

カンザキレイカ・カナデ
神崎レイカ・奏
親族を全員殺され、その仲間に家に放火されてすむところがなくなるが刹那と一緒に住む。

刹那とは幼馴染でずっとクラスも一緒。美少女。
レイカはアサルトライフル 爆発物

サカモトシオリ
奏はアサルトライフル ハンドガンを得意とする
坂本栞

走るゾンビに追われていたが刹那に助けられる。
かなり頭がいい。皆の知恵袋としてがんばっていたがクラスメイト

に、

ゾンビの餌にされそうになる。

助けられたあと刹那と行動するようになる

サイトウベニ
西藤紅

北海道薬品札幌本部で刹那を助けるが希の触手に腹を刺されるが刹

那にM93Rを渡した後死亡。

キリシマノゾミ
桐島希

実験台にされ暴走して刹那の手で殺される。

第3話 孤立（前書き）

藤美舞

頭脳 ★★★★★☆

戦闘力 ★★★★★☆

統率力 ★★★★★☆

速さ ★★★★★

第3話 孤立

話し合った後葉が

「ところであなた達何者？何で銃なんて持ってるの？何でそんなに強いのか？何であいつら倒せるのか？金属バットで殴られても死ななかったのよあいつら」

と質問攻めにしてきたほかの4人は答えられない質問もある、仕方なく俺が答える

「俺たちはある部隊の5人チームだ、銃は仕事柄家にある、あいつらはゾンビだ、頭の中には食欲しかない、原因はあるウイルスだ、脳が指令を出しているから頭に衝撃を与えれば死ぬ。こんなところだ」

5人は驚きを隠せなかったらしくこっちを見ている。

葉は

「何でそんなに詳しいのよ」

と聞いてくるそれにあわせてほかの生き残りは

「お前が犯人なんだろ、おい。俺たちが馬鹿にしたからってここまでするのか」

どうやら話を聞いていたらしいまあ最後のほうだけらしいが

「俺が犯人だったとして自分の身を危険にさらすか」

そう言う

「じゃあ何でそこまで詳しいんだよ」

俺は言葉を詰まらせる。これだけは言えない。

「言えないって事はお前が犯人なんだろ」

と言ってくる。孝達を見ると話し合っている。生き残りの一人が「お前ここから出て行け」

と言った、それに反応して生き残りの男子陣も出て行けと言う。

生き残りの女子陣は何も言わない、犯人と思われる奴と一緒に居たくは無いが守ってくれる人が居なくなるのは厳しいのだろう。

5人は俺を信用してくれるだろうか、無理だなこんな奴と一緒にいたら共犯者ということになるのだ。

「わかった出て行くよそれでいいだろ」

俺はそう言う生き残りの代表みたいな奴が勝ったなとゆう感じの笑みを浮かべる

「俺と一緒に出て行く奴はいるか？」

と聞くと孝達が手を上げる

「俺たちも行くぜ、言えないってことは軍に入った理由なんだろう」
まったく何でもおみとうしかよ

「ああ、じゃあ行こう」

代表は顔が青くなる、守ってくれる人が居なくなったからだろう自業自得だ馬鹿め。そいつは

「待ってくれお前たちが出て行くと俺たちは誰に守ってもらえばいいんだよ」

と言う。俺は切れた

「守ってもらうだと自分の身ぐらい自分で守れ、人をとことん馬鹿にして困ったときには利用して、俺達はお前達の親じゃないんだよ。お前達はここで死ねくず共が」

5人は苦笑する。

結局俺は一人じゃなかったのだ、それほど信頼されているのだ嬉しい以外何も無い。

次に休めるところに着いたら軍に入った理由を話そう

第4話 一度目の世界の終わり（前書き）

西藤孝

頭脳 ★★★★★

戦闘力 ★★★★★

統率力 ★★★★★

速さ ★★★★★

第4話 一度目の世界の終わり

午後3時

俺の家に着いたらすぐに皆を集めた

「俺の軍に入った理由を聞いてくれないか？」

「もちろんいいぜ」

孝はそう答えてくれた

あの日は普通の日だった、父親が自衛官で銃の使い方を知っていた、そんなものが必要ないと思っていた、

その日から俺たちの日常が終わった。家族で旅行に出かけていたんだ、北海道の旅行だ。

その日は恵庭に居たんだ、朝目覚めてみると周りは地獄だった。

すぐにそこから逃げた、走っても走っても地獄は続いた。

北部隊に着いたら両親が居た、ゾンビになって人を食っていたんだ、そこにあつた大きい石で叩いたんだたまたま頭に当たって死んだけど後ろから大量に来ていた。

食われていた人は銃をもっていた89式5.56mm小銃だったそれをとり弾を取った、すぐに装填して打ちまくったなぜか使いこなせた。そして生き残っていた自衛官が助けに来てくれた、そして門を閉じた。

そこで何が起こっているのかを知った札幌が無事なこと北海道でしか起こっていないこと札幌に行けば助かること頭を撃てば死ぬこと
e t c

マガジンをもらいここを出ることにした幸い弾はかなりある。

車は使えない、しょうがなく歩くことにした、そこから本当の地獄

が始まった。

いままでのゾンビはのろのろと歩いていたが走ってきたり石を投げてきたり罫を作ったりと進化していった、最後にはゾンビですらない化物まで現れた。巨大なたこや象、カメレオンなどの水族館や動物園の生き物が出てくる、札幌まで16時間かかった。札幌はまさに地獄だったありえないほどの化物がうろついていたのだ、一部隔離されていた、そこはかなり高い建物だその窓からゾンビが落ちていく、それを片っ端から食べていく化物、こええ。

見ていたら北海道薬品札幌本部と書いてある看板があった。

見ていた限りあそこが犯人だろうと考えた。

そこに忍び込んだまではよかったがそれからが問題だった大量のゾンビが居た。

これぐらい楽勝だと思い銃を構えた、その瞬間何かが飛んできた。後ろで壁がえぐれる。

ゾンビの手が伸びてきたのだ、中には鳥を使い自分に引き付けてくるのやアイアンメイデンを持った奴まで居た。

しょうがなく刀で突っ込んだ、進む方向のゾンビを殺し進んだ、知らないうちに事件の中心に来てしまったのだ。もうそこは今の世界とは違う場所になった

第5話 終わりを生み出す化物（前書き）

神崎レイカ

頭脳 ★★★★★

戦闘力 ★★★★★

統率力 ★★★★★

速さ ★★★★★

第5話 終わりを生み出す化物

俺は研究室に入った、そこには俺より年上に見える女の子が居た。ガラス張りの部屋に監禁されていた。

実験材料にされているのか腕に噛み傷があった傷の具合からみて数時間前に噛まれたみたいだった。

だが発症していない、どうやら成功例らしかった。迷わず助けた。そして気がついた周りに犬が居ることに。それが普通の犬だったらよかった、だが耳がなかったり皮がすべてむけていたり明らかにゾンビ犬だった。

すぐに銃を撃った、だが動きが速くてあたらない。すぐに刀に切り替える突っ込んでくるのを待つ、だが刀に変えたら攻撃してこなくなった。銃に変えると攻撃してきた。

それで確信した、こいつらはいないスピードで進化していく。気がついた瞬間腕を噛まれた。感染してしまった、もう終わるならと刀で突っ込む。

すぐにかたずいたがゾンビ化が進んでいるのか傷は痛くない、傷はふさがっている。

ふさがっている？おかしい、今までのゾンビは傷だらけだった、女の子も傷がふさがってきている。

とたん拍手が聞こえた、振り返ると一人の女が立っていた。

「さすがね工藤利那、まさかSウイルス（Sは殺戮のS）と同化するなんてね」

「お前がこの事件の犯人でいいのか？」

「半分正解で半分は不正解、私はこの元凶となったウイルスを作っただけよ」

「彼女は何で同化している」

「自ら望んだのよ実験台になりたいってね。それと同化とすこしちがうわその子はいずれ暴走するわよ、そうなら誰もその子を止

められない、すべてを壊してもとまらない。」

「その時は俺が止める、俺も彼女と同じ存在になったんだろう」

「でも力の使い方を知らないんでしょ」

「何とかするさ、ここまで生き残ってきたんだそう簡単に死ねるか」

「そう、あなたは本当にあの人に似ているのね、あなたに本当のことを教えてあげる。」

あなたの両親は本当の親じゃないわ」

「えっそんなこと」

「嘘じゃないあなたは私の親が生んだ子よ、つまり弟になるわ、で引き取られた。そろそろ時間だわ、

暴走が始まるわよ」

いきなり皮膚から触手が出てくる、それを俺めがけて伸ばしてくる、よける、撃つの繰り返しをする。

これじゃ倒せないことがわかる、かわしきれなかった触手が銃をはじく。

その触手をつかむとちぎれた、ゾンビが怪力のように俺も怪力になったのだろう。

瞬間的に速度を上げて彼女の顔をつかみ

「ごめんな」

と泣きながら力を入れて握りつぶすと同時に触手が腹を貫く。

彼女は起き上がらなかった。

俺の姉と名乗る女は

「生きたいのならついてきなさい列車まで案内するわ」

と言って歩いていく、とりあえずついて行った。

傷はふさいでいった。

脱出できると思っていた。

第6話 それでも悪夢はすがりつく(前書き)

神崎奏

頭脳 ★★★★★☆

戦闘力 ★★★★★☆

統率力 ★★★★★☆

速さ ★★★★★☆

第6話 それでも悪夢はすがりつく

倒れている少女から触手が伸びて生き物だった物を取り込んでいく。少女は笑っていた。

列車に乗った俺達は一息ついた。

化物を12匹ぐらい倒してやっと着いたんだから休んでもいいだろう。

「んで、何で俺を助けたんだ？」

「あなたがウイルスと同化したから、ほっといたら暴走するかもしれないからよ」

「ウイルスと同化したらどんなことがあるんだ？」

「身体的なのは怪力と異常な回復速度ぐらいじゃないかしら、後は簡単な作りなのは体内で作り出せる

ようになってるはず、手のひらに手を当ててナイフをイメージしなさい、それを握るように動かす。」

言われたようにやって見たらナイフが出てきた。

「便利な能力だな」

「まったくね、その実験がうまくいけばよかったのに」

「そういえばあんたの名前は？」

「言ってなかったっけ？ 私は西藤紅」

「あの女は誰だ？」

「あの子は桐島希、私達の兄妹よ、ちなみにあなたの方が年上よ、見た目じゃわからないと思うけど」

俺の方が年上だったのか胸の大きさてk————いやいや何を考えにいるんだ俺。

「そうそう、あなたが初めてで唯一の成功例だからあんまりわから

ないから」

その割りには詳しいな

「そうなのか——ってドアから離れろ！」

「えっ？」

ドアが壊れた瞬間に触手が伸びてくる、それをぎりぎりではよける

「なっ、希」

「こ：ろ：し：て」

「おいどうやったら死ぬんだ？」

「原型残らないぐらいにぐちゃぐちゃにしてみる？」

「やってみる」

「冗談のつもりだったんだけど」

刀を作り出して突っ込む、二本の刀で近づく触手を斬りながら近づく。

頭から真つ二つに切り裂く、そのはずだった。

急に希が消えた。

どうやら俺と同じ事ができるらしい。スピードは希の方が遅い。

狙いを紅に変えたらしく紅の後ろに居た。

紅はまったく気がつかずきよろきよろしている。

一瞬で希との距離を60cmにする。

刃が肌に触れる、のけぞった瞬間に切り刻んでいく。

触手は俺の腹を貫く、その後ろに居た紅に当たる。

それに気づかず切り刻んでいく。

ぐちゃぐちゃになった希にそこにあった燃料とライターで火をつける。

今度こそ希は蘇らなかった。

後ろに居た紅に気がつくとすぐに手当をした、紅は俺にハンドガンのベレッタM93Rを渡してくる。

「形見として持っててちょうだい、私はもうだめみたいだから」

「縁起でもないこと言うな！」

「どっちにしても持っていて、治ったら取りにいくわ」

「ああ、それまで待ってるからな」

紅は笑顔で眠った。

第6話 それでも悪夢はすがりつく（後書き）

字の訂正などがあれば教えてください。
出て欲しい武器なども待ってます。

第7話 平和だったころなら（前書き）

坂本栞

頭脳 ★★★★★

戦闘力 ☆☆☆☆☆

統率力 ★☆☆☆☆

速さ ★☆☆☆☆

第7話 平和だったころなら

「という事があったんだけどその時の事は原発事故ってなったんだ、北海道に入れなくしたのに。今度は世界一斉に始まった」

「じゃあその紅って人は？」

「死んだよ、脱出する前にね」

皆が喋らなくなる、その沈黙を破るように栞が質問してくる。

「でも紅さんが死んだなら誰がウイルスをばら撒いたの？」

「政府にも奴らの手先がいるみたいだ、紅姉さんが言っていた」

「じゃあ俺達は政府を相手にするのか？」

「いやそれはない今頃全滅してるだろう、奴らの殺し方は俺達ぐらいしか知らない」

「じゃあどうするの？何か策でもあるの？」

「五人分のワクチンがある、それを使えば感染しなくてすむから打つといってくれ」

「それがあれば何とかなるの？」

「ああ、それとウイルスもあるから間違えるなよ、ワクチンが青、ウイルスが紫だから」

「おうっ！て何でウイルスがあるんだよ？」

俺の言葉に孝が食いついてくる、

「俺の能力は時間がたつにつれて弱くなるから一応100本ぐらい貰って来た」

「そんなに！！」

「それで、今は何が使えるんだ？」

「回復能力は銃の傷なら一分ぐらい、後何かを作り出す能力以外なら使える」

「ワクチンの副作用は？」

「一時的に動けなくなるがそれ以外は無い」

「それって結構きついわよ」

「そうなのか？」

「そうよ」

「で何分間動けないの？」

「半日」

「」「」「はあ？」「」「」

いやゝ皆さんいいハモリですこと

「だから半日だって」

「その間は動けないの？」

「動こうと思えば動けるけど血管が破裂するな」

「ホントに？」

「ホントに」

「じゃあその間誰が守ってくれるの？」

「俺だが？」

「大変じゃない？」

「お前達のためなら何でもできるさ」

「かっこつけないほうがいいよ」

「やっぱり似合わない？」

「うん」

「マジか」

「刹那だといつのまにか片付けてる感じがいいと思うよ」

「そうかな」

「うん」

「じゃあそうしよう」

「というか何でそんなに気にするの？」

「そりゃあもてたいからだろ」

「何でか女子は刹那に近づかないんだよな」

「それどころか俺が教室から出ようとしたら近くの女子が離れるよ

うに動くんだよ」

「なんでかなー？」

（もしかしてモテモテなの気づいてない？）

「でも声くらいかけられるでしょ？」

「いやかけられないけど」

（嘘でしょ？ 学校一番のイケメンって女子だけで噂の刹那と二番目にイケメンの孝が？）

「まあ俺達は負組さ！」

「それはつまり失うものが何も無いってことだ！」

「もし世界が元に戻ったらそのときは勝組さ！」

その後皆で笑いあった。

俺達は世界が終わってから初めての普通の会話をしたんだ。

それはまだ俺達は人間ってことだろう。

そして同時に気が付いていた、俺達はこれから装備目当ての人間に襲われること、

あの時よりも進化が早いこと。

俺達は死なないために多くの人を殺すしかないことは皆もわかっているはずだ。

それをあえて口に出さないのは葉のためだろう。

葉は俺達と違って一般人なのだ。

俺達は人間に作られた化物なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0332x/>

そして世界が終わったところに

2011年11月17日17時57分発行